

# 中国の変化

南條 克巳

世界が目まぐるしく発展変化する中で、最近の中国の変化は特に著しく激烈である。しかし、日本ではあまり注目されていないようだ。それは、先の江沢民・国家主席の訪日を機に生じた中国嫌悪感の後遺症のせいであろうか。日中間でギクシャクしている諸問題が根本的に解決されていないからであろうか。あるいは、日中間の基本的な関係は良いので、あとはもういいと流されているためであろうか。

「江主席は歴史認識の重要性を強調する余り、戦後は平和の道を歩んできたと思う多くの日本人を戸惑わせ、げんなりさせた。・・・中国側が日本の侵略でひどい目にあったという被害者意識の強い歴史だけを強調し、日本側も不用意にそれを刺激する。・・・」(9月29日朝日 社説)とメディアは今年、日中国交正常化30周年という節目のこの時期になってもまだこう書いていた。

今年の9月、訪中した日本の外相と中国首脳との会見で「歴史を鏡とし、目を未来に向ける」と重ねて提起された。外相もこれに「非常に賛成だ」としたが、首相の訪中日程はいまだに確定していない。その後、時期は年末かという観測が流れたが、まだ決まっていない。近く行われるAPECの首脳会談に持ち越したのか。

30周年を記念するさまざまなイベントが両国で計画された。北京では13,000人が参加する国交正常化祝賀会が人民大会堂であったば

かり。そこで、江主席は重ねて「歴史を鏡とし、目を未来に向ける」と演説した。これには日本から80余名にのぼる代議士たちが参加したが、予定された「お祭り」だというのに、日本の首相の姿はそこにはなかった。また、北京の大運動場では35,000人が参加する日本のロック・コンサートが2,000名の中国警官が警備する中で行われたという。そして、そのだいい前に、髪の色を染めたロック・GLAY(細川元首相・名誉団長)が江主席に会見していた。日本に対する皮肉のようにも見えたが、「中国人民の感情」をもって日本に訴え続けるであろう。

また、今年の7月3日の新聞(朝日)が、日本の高校生の中国修学旅行で「南京大虐殺記念館」見学を除外すると鹿児島県議会が決めたと報じていた。そして、その同じ紙面に「マージャン世界選手権大会」を寧波市で開催予定とあった。「麦と兵隊」の杭州湾で、何事もなかったように「初の世界規模の競技大会」があるのだそう。日中の間は、かくも平和で良き時代になったのかと感じさせる。しかし、神経のなさを疑いたくもなる。その懸念する声が聞こえた訳ではないのだが、果たして、最近競技大会開催の場所は中国・寧波をやめて日本に変更されたと出ている。こうして、日中間の幅広い友好的な交流が進んでいくことを願いたいものだが、何故か一抹のすっきりしない感じを払拭出来ないのは、時代の違いからするものであろうか。しかし、現

在の日中間の交流往来について、「日本は昔、中国から進んだ文化、文化の精粹を学び取った。遣唐使や留学僧がそのいい例だ。ところが現在、中国が日本から学び取るものはカラオケぐらいしかない」という「日本観」を抱く中国の人が大勢いることも、日本は視野に入れて置く必要はないのだろうか。このような日本観のほかに、中国の日本に対する「国民感情」「民族感情」となると、日本の「中国嫌悪感」の程を遙かに超えて強烈で根深いかもしれない。

自ら卑下する必要はないが、中国に対する「日本の影」は、ここに来てかなり薄くなっているのは事実だ。果ては、軍事、経済面での「中国脅威論」が目立つ。日本のODA削減と機を一に軍事的脅威論、経済脅威論が唱えられた。「経済大国」「アジア経済の盟主」の地位は中国に取って代わられる勢いだ。それを許すも許さないも、日本は生き残りを賭けて、生産拠点を次々に中国へ移転し、産業の空洞化の波は防ぎようもなく押し寄せている。そして、これから対中進出を検討するのでは手遅れだという今までは考えられなかった状況が出現している。

一方、中国は現時点ではそのようなことには余り目を配らずに「世界へ」羽ばたこうとしている。特に外交の面では。

APEC に出席するため、江主席はまず、シカゴへ飛んだ。中国も情報を公開するようになり、江主席外遊の概略スケジュールが世界に報道された。それによると、江主席はシカゴからヒューストンへ行き、ジョージ・ブッシュ元大統領に出迎えられ、さらに「西のホワイトハウス」と言われる閑静なクロフォード(村)にあるブッシュ大統領の牧場(私邸)へ行き、パーベキューを愉しみ、かつて中国の実力者・故鄧小平がカウボーイ・ハットを被って愛嬌をふりまき大人気を博したが、口

デオや投げ縄競技を見学する。また、内外報道陣をシャットアウトして会談を行なうという。二人だけ(随行は通訳のみ)の船上秘密会談を行う予定だ(1時間)。さらに、シアトルへ飛び、ボーイング社の工場を視察し、経営陣や財界と会う等、正に東奔西走の忙しいスケジュールが組まれているという。今世紀初の中・米首脳の大セレモニー、ショーが始まろうとしている。

先の訪米では途中、江主席是北京から日本列島を横目にハワイに立ち寄っている。「パールハーバー」記念館を見学しながら、先の大戦で日本軍国主義と肩を並べて戦った中国とアメリカの旧情を温め合った。今回も中国で日本軍と空中戦を交えたかつての米空軍の英雄伝が語られ発信された。さらに、中米間の貿易規模も、トップの座を長年維持し続けて来た日中貿易を凌駕し、920億ドルに達する勢いだと中国は観測している。政治も外交も経済・貿易も、米中はいま、大規模な「戦略的協力関係」の構築を強調している。

今回、アメリカで行った最初の講演で、江主席は冒頭、ブッシュ大統領は「中国人民の老朋友」だ。かつて中国駐在米国リエゾン・オフィスの長として、中米関係発展のために多くの有益な仕事をしと持ち上げた。

また、江主席は演説の中で、自国の宣伝も忘れてはいない。中国の「改革開放」政策実施以降の経済発展、社会主義市場経済体制、GDPの成長と社会主義民主政治などを強調し、また、中米間の意見の食い違いには「君子和して同せず」と孔子の言を借り、これは社会関係の法則であり、世界の各種文明が協調・共生するための準則だと、アメリカとの間にあるギクシャクした関係や協調しない独善的なやり方を諭してもいる。さらに、台湾問題については「平和統一、一国二制」の政策を強調し、「台湾独立」の言動はこの地域に

対する「最大の脅威」だとアメリカの出方を強く牽制した。アンチ・テロリズム、大量破壊兵器の拡散防止などに触れたあと、世界最大の発展途上国である中国と世界最大の先進国の米国とが互いに手を携えて努力しようと結んだ。

江主席は党、軍、政府の最高責任者になって以来、憲法を修正し、党の新しいテーゼである「三つの代表」論を打ち出すなど、毛沢東、鄧小平に次ぐ中国の実力者としての地位を固めつつある。即ち、政治の面では憲法を修正し、社会主義中国への社会主義市場経済理論の導入を明記した。中国の特色ある社会主義を標榜し、資本主義も社会主義も、良いものは利用するという柔軟で現実的な考え方だ。また、政党政治を目指し、単なる理論だけでなく、政策を掲げ開示し、人民の福祉向上（「人民のために奉仕する」）に全力を尽くす政党政治を目指し、これと同時に「時代と共に進む」理論を加味し、市場経済理論や所有権の定義などの修正に基づき、特に「改革開放」以降誕生した私営企業家・財産家でも、思想的に良い者は共産党に入党させる道を拓いた。経済の面では、「富国強兵」を目指す。これがなければ、中国の「世界へ」の進出は出来ず、先進国に伍して行けない。また、これは近代以来の民族的・国家的宿願でもあった。

江主席の訪米後、16回共産党大会が開催されるという。予定では10月開催であったが、江主席の訪米、メキシコAPEC首脳会議参加などがあって延期されていた。

中国は、9・11テロ事件以降、減退し出したアメリカの独善的な「一極」主義の隙間をぬって、外交、経済など各方面にわたる新しい巨大勢力として「中華文明」主義を世界へ打ち出そうとしている。

中国は今後も激烈な変化を繰り返しながら、自信を持って発展し続けるだろう。これと同時に、多くの解決すべき問題を抱えながら。中国が、そして6,635万の党員を擁する中国共産党が「最大与党」として、真に「人民のために」を最大の目標として真剣に追求していく限り国民からの支持を得ることが出来るであろう。中国共産党は、人口の大半を占める農民の生活問題や農村の経済構造改革を最大の問題として取り組んでいる。そして12.96億を擁する中国の人口問題、食糧問題、貧困・格差等の社会問題、人権問題、党規律の問題（賄賂などの腐敗問題）、科学技術（人工衛星、バイオ技術、科学技術教育など）、西部開発、チベット高原鉄道建設、三峡ダム建設など国土開発・建設問題、治水・砂漠化防止・環境整備の問題、さらには少数民族の問題及び台湾問題等の重要な内政問題のほか、外交問題等があるだろう。

中国は激烈な構造的な変化発展を遂げつつある。中国が今最も欲しているのは地域世界の安定した平和の環境であり、その環境における中国自身の発展であるに違いない。その意味で、中国が日本に対する軍事的・経済的な「脅威」になるということは成り立たないだろう。日本も中米関係のように、日中関係を一層深めていく必要がある。

（本学文学部教授）